Kurume SHIN-AI women's College

久留米信愛女学院短期大学研究紀要，第 33 号，65～69，(2010)
KURUME SHIN-AI WOMEN'S COLLEGE BULLETIN, No.33, 65～69, (2010)

［研究ノート］

「ピアノによる風土記」についての一考察

原　　浩　美

A STUDY OF "FUDOKI FOR PIANO"

HARA Hiromi

I have had an opportunity to study and play piano music by a Japanese composer. The experience has made me regret as to why I, as a Japanese, had not played Japanese composers' works at all while playing mostly Western pieces. Music, which I believe is an effective means of expressing the environment and culture of homeland where a composer is brought up, would necessarily reflect national and local characteristics of the composer. A Japanese pianist, therefore, would be able to interpret the music more deeply. These are some of the thoughts I had upon studying "FUDOKI (ethnography) FOR PIANO." This paper is the summary of a study conducted under the composer and through actual renditions by this writer.

Key words：Japanese composer, piano works, locality
キーワード：邦人作曲家，ピアノ作品，地域性

1．は　じ　め　に

平成22年２月に，久留米を中心とした音楽家の演奏活動団体であるひびきの会の創立40周年を記念する演奏会が開催された。この演奏会において筆者は，久留米市出身の作曲家のピアノ作品を演奏する機会を得た。これまで邦人作曲家の作品を公の場で演奏するのは少なく，圧倒的に西洋音楽を中心に演奏してきた。前述したひびきの会主催の演奏会でも，器楽曲の邦人作品をとりあげることは，２回くらいであったと記憶している。一方，歌曲の分野での日本歌曲は，演奏者も聴き手も馴じみがあり，何度も演奏されてきた。邦人作曲家の器楽曲作品はたくさんあるにもかかわらず，それは日本歌曲と比較すると演奏会のプログラムに取り上げられることは，少なかったということである。嗜好の違いもあろうが今回演奏した「ピアノによる風土記」を通して邦人作曲家のピアノ作品について考えてみることにする。

現代日本のピアノ曲を弾きたいと願う人が，最初に難しいと感じ，とっつきにくく思うのは，記譜法が従来学んできた書き方と違うというところにあるのではないだろうか，とピアニストの平尾はるな氏が記述していたが，その考えは確かに筆者も感じるところである。それから独特の響きという点で，幼い頃から西洋音楽中心にピアノを学んできた者には，直ぐには耳慣れない感もぬぐえないのではなかろうか。この西洋音楽嗜好が，いつのまにか邦人作品を遠ざけていたように考えられる。本稿は，この曲の作曲家から直接指導を受けた体験と研究演奏を通して得た考察を，実践記録としてまとめたものである。

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

2.「ピアノによる風土記」

1）作品の概要

この作品は，５つの楽曲から成り各楽曲の小題には，「里神楽」「祭文」「田楽舞」など，日本独特の固有名詞がある。また，その出版楽譜には，「音による風土記を，ピアノを借りながら，一地方色におわることなく現代風に響かせてみたいと思い書いた」と作曲者の田村徹氏によるコメントが記されている。以下５曲の小題である。

１里神楽　２子守唄　３わらべ唄
４祭文　５田楽舞

作曲者についても，ここで紹介しておきたい。田村氏は，1963年「筑後地方の俗楽によるコンポジション」で第４回 TBS 賞特賞を受賞された。翌年には「三重奏曲」で34回毎日音楽コンクール作曲部門第３位に入賞。他の主要作品としては，「ピアノ協奏曲第１番・２番」，「東洲斎写楽」，「古代紀行」，「柳川風俗詩より」，「漂白Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（種田山頭火の世界）」，「句を読むように筝を弾き」，「南の島の俳句歳時」など，郷土の自然や風土，地域の精神，民俗や大衆感情に根ざした独自の作風で知られ，他にも多岐にわたり多くの作品があるが，それらの作品は国の内外で演奏されている。

2）５曲の演奏記録

第１曲「里神楽」
演奏時間：２分
指定速度：Moderato Allegro vivace
演奏速度：♩＝184～192
解　　説：田舎の寺社で，諸々の祭りに演奏される音楽を里神楽と言い，それを素材にして作られている。

この曲は，律動感を感じさせるように演奏すべき曲で，それは左手のリズム形態がある一定の間繰り返されることによって，気持ちも高まってくる。so と do の重なり合った音を無声音として鍵盤をおさえたままで保ち，その倍音が響くなか左手のリズムを奏すが，３通りの ad lib が提示されていて，さらに刺激となる。和太鼓が叩かれているように聴こえるという感想を聞いた方から伺ったが，自然と和太鼓をたたいているかのように演奏したくなる力がこの曲にはある。右手は付点のリズムを素材に旋律がつくられていて，和太鼓と絡み合うように類似した旋律の繰り返しで終わる。

第２曲「子守唄」
演奏時間：２分54秒
指定速度：Andante con amore　♩≒56
Piu Allegro a tempo
演奏速度：♩＝120～152
解　　説：日本のどこにでもありそうな子守唄を素材にして作られている。

この曲は，８分の６拍子と８分の５拍子が交互であったり８分の６拍子が２小節続いた後に８分の５拍子が現れたりと流れがおもしろい。変拍子で，その流れに規則はないようである。中間に ad lib 的な単旋律が出てくる。この ad lib のイメージは鳥の鳴き声あるいは，古典的な笛のようでもあり，自由に想い描き演奏した。作曲家からは，アクセントがつかないように指示された。これは，一つの自由な旋律として器楽的に演奏しない方が，流麗さが出てくると判断することに繋がった。

第３曲「わらべ唄」
演奏時間：２分13秒
指定速度：Moderato Vivace　♩≒176
Meno Mosso Vivace
演奏速度：♩＝160～184
解　　説：わらべ唄を素材にしながら，わらべ唄らしからぬ曲となっている。

この曲は２小節の単旋律を序奏のようにして始まる。わらべ唄を懐かしく感じさせるのは，この旋律であろう。その後はテンポを速め，不協和音の響きがエネルギッシュに奏される。遊びに興じお祭り騒ぎのように弾んで演奏したが，わらべ唄の雰囲気はそのスピードの中で，ちらりちらりと感じられるところが演奏者にとっては気持ちの良いことであった。変拍子が使われ，右手旋律はオクターブのシンコペーションの多

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

用で時間も呼吸も高揚する。突然の p は一瞬で別の違う世界に入り込む効果を生んでいる。強弱とスピードのバランスを瞬時に取ることは，心も身体もしなやかさと柔軟性が必要とされる。それがうまく演奏できれば，音楽としては緊迫感があり非常にロマンを持って聞き手にも伝わるように感じる。

第４曲「祭文」
演奏時間：３分56秒
指定速度：Largo　♪≒63～♩≒116　Andante
Andante Andantino Moderato
Allegro Largo
演奏速度：♩＝160～184
解　　説：田舎の祭りに小屋掛けして，節をつけて語る庶民の音楽を祭文と言い，それを素材にして作られている。

この曲のテンポは，Largo を基にして，だんだんと Allegro の順に速くなるが，感情にまかせて，比較的自由に演奏するようにと記されている。強弱は pp からゆっくり弾きはじめるが，２小節でクレッシェンド～デクレッシェンドの抑揚を表現せねばならない。この抑揚の頂点は，大変強くはない。42小節に入ってようやく f の強さが表現される。終盤に入った61小節の G.P.（グランドパウゼ）の長い間は，演奏会場の広さと聴衆と演奏者とのコラボレーションした“生”の時間となり，その間合いが大きな印象となる。その後旋律はうねりのように最低音 do から半音階で２オクターブ上がり，Largo で fff という最大の強さと豊かさで曲が高揚して終わる。筆者はこの楽曲に，雅楽が重なってイメージされる。

第５曲「田楽舞」
演奏時間：２分14秒
指定速度：Presto　♩＝184～196
演奏速度：♩＝192
解　　説：農民の労働歌に舞をつけた音楽を，田楽舞と言い，それを素材にして作られている。

この曲は，第１曲の「里神楽」と類似した始まり方をする。左手の同一音で休符を交えた４拍子のリズムが，和太鼓を打ち鳴らす感じを再度感じさせる。付点のリズムを右手と左手で激しく表現し，和音でその付点のリズムを両手で重ねて打ち鳴らすかのように上行，下行する。力強さと激しさを表現したくなる音楽である。４分の４拍子であるが，複合２拍子のようにリズムを捉え，ある程度の揺らぎを取り入れた方が，一層魅力を増す曲であると考える。ジャズのように弾いても可能だと助言を受けてもいる曲である。

３．考　　察

現代曲の中には，五線記譜法を使わないで書かれた楽譜も一部にはあるが，ほとんどの作品は五線譜を用い，定量音符を使って書かれている。が，中には若干ながら従来の楽譜には見られない記号が使われている。今回の楽譜には唯一「◇」の音符が１曲目の「里神楽」に出てきている。これについては，音を出さずに鍵盤をおさえたままで保つようにと丁寧に指示されていたので問題なく譜読みができる。他に拍子記号が冒頭にないものや小節線のはっきりしない現代曲もある。これは１小節の中に書かれる音符が一定の数や長さに限定されないという解釈のもとで，アクセントをつける位置が創作者の自由になる。それを汲み取った演奏者は一定のルールにとらわれずに表現できる自由さが出てくる。この作品には，変拍子を用いた作品として，「子守唄」「わらべ唄」「祭文」の３曲がある。これらは，練習していく段階でその変拍子の流れが面白く感じられた。音楽創りを自然と導く力のある曲であった。

また，現代音楽の作品では，強弱の指定が非常に細かく何段階にも決められている場合がある。例えば pppp から ffff のようにダイナミック・レンジの幅が拡げられ，古典音楽では考えられなかった表現も要求される。この曲は fff や sfff，pp が使われダイナミック・レンジの幅もあり，多彩であったと言える。例えば「里神楽」の冒頭では pp から音楽がはじまり少しずつ accel.（次第に速くなる）をするが，pp

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

という弱弱しい音量の中，わずか2小節という数秒の時間内での表現となる。緊張感がある。クライマックスは，82から83小節のsfffである。半音階で2オクターブ上昇し，一瞬にしてsfffで終わりとなる。強弱の演奏効果は人の耳に大変分かりやすく印象も長く残る。この作品の場合強弱は前後の対比と時間で効果をあげていると考える。また，倍音を利用し，響きが重なり合うことで里神楽という音楽のイメージを導きだして聴き手に伝わったのではないかと推察する。

演奏速度として作曲者の意図する速度と実際の演奏速度を比較し，さらにCDとテープに録音されている2人の演奏家との演奏速度の比較をしてみた。テンポの違いによる表現の違いは，細かいニュアンスの捉え方にも関係して演奏に影響されていたように感じた。今回の演奏は，律動感を出したいと願っていたが，思うような結果が感じられず，全体をとりまくテンポ感にも大きく影響していたと考えられる。一概には言えないが，テンポが遅いと重厚感・安定感・安堵感に繋がるし，速いと軽妙感・緊迫感・流麗感を感じることになるのではなかろうか。その感じ方は表現力に影響し，音楽に個性を持たらすであろう。それは音楽の持つ普遍の魅力になっていると考える。テンポが感性に訴える力は大きい。

ところで，楽器を演奏する時に演奏者はフレーズを意識した演奏を心がけるが，それは休符や息つぎに関係する。管楽器などと比べるとピアノの場合，その意識は薄れることがある。息を吹き込むことが要らないピアノの構造上，テクニックが複雑，高度であるがゆえにそれを弾きこなすことを無意識に優先して指が動いているようだと自己の経験から感じることがある。今回の作品については，「間・息（ブレス）」ということを一つの奏法として身につけることが必要となった。この「間」は一定の時間というより，その時の音楽的状況，前後関係によって変わり，演奏会場の聴き手とのやりとりとも言うべき創造的な“静”の時間ととらえた。そしてそれは，演奏する度に自分の音や間を聴きながら創っていくものである。

以上いろいろと方法，奏法に関して述べてきたが，この作品は「律動感」あふれる表現，緊張感のある「間」という二つの感性を思う存分に表現していくことが肝要であるように感じた。

4．お　わ　り　に

今回この作品の作曲家が，東京での教育活動を終えられて帰郷されたことが研究演奏するにあたって大きな動機となった。何故なら作品について作曲家自身に直接話を伺える，またとない素晴らしい機会だからである。

この作品と出会い，演奏会で演奏することを目的に練習を重ね指導を受ける度にこの作品の演奏の楽しさは深まっていった。

現代音楽を弾く喜びは，伝統にとらわれない新しい音楽を，自分の発想で思う存分表現出来るところにあるのではないだろうか。楽譜を読んで直ぐに音楽を感じることは，現代音楽の場合も中々難しい。しかし，繰り返し楽譜を目で追い，音を聴くと，日本人の心にひそむ郷愁といったものが感じられていく。作曲家が楽譜に記していたその言葉そのものを，肌で感じられる思いがするのだ。最初に感じていたとっつきにくさが，しみじみと親近感に変わるのである。

表現者として音楽を演奏するには，まず心の中でどのような音楽にするのかを，常に意識すると思う。そのためにはその音楽を好きになる，理解することも一つであろう。邦人作品は，記譜法にある意味自由さがあるが，それを理解すれば表現の幅が拡がる。創っていく楽しみがあり独自の音楽を創る喜びへ大きくつながっていくことを実感し，好きになる，理解することに導いてくれた。音を聞くと日本人の心にひそむ，郷愁といったものが感じられるのは，今回の作品には大変強かったと思う。幼い頃から育ってきた土壌，空気，その国民性や地域性は表現の一つの媒体である音楽作品にも色濃く反映されるだろう。それを表現する演奏者にも似たような環境で育ってきたのであれば，そこから発せられる音楽は，西洋音楽には無い独自性のある

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

音楽として伝えていくことが出来るのではないだろうか。日本人としてこのような作品を今後も研究し演奏していくことは，新たな音楽活動に繋がると考えている。

参　考　文　献

1）「ピアノによる風土記」：全音楽譜出版社

(2010年 3 月31日受稿)

NII-Electronic Library Service